

心から愛する両親
アンとマリー・ブラムに

はじめに——新版によせて

本書が二〇〇二年に最初に出版された直後、私は書店のトークショーで、この本の主人公、チェーンズモーカーで、詩人で、アルコール中毒で、一筋縄ではいかない天才心理学者のハリー・ハーロウについて語った。もちろん、トークショーでもっぱら、彼が二〇世紀半ばに成し遂げた大改革の話をした。愛はまっとうな感情であり、非常に重要で、人間の発達を方向づけるものだと心理学者仲間を説得するために彼が孤軍奮闘した話だ。

説得力はあるが物議を醸した、赤ちゃんザルを使った彼の研究に、私はずっと強い興味を感じていた。母親が子ザルを拒絶するのを観察した研究である。研究者の予測では、子ザルは神経質になり、元気をなくし、いくぶん引きこもりがちになるだろうと思われていた。しかし実際にその目にしたのは、子ザルたちが突然、死にもぐるいになって働きかける様子だった。彼らは母親に愛してもらおうと必死に

なって、甘え声を出し、すり寄り、撫でさすり、呼びかけた。

彼らは生まれて最初の基本的な関係をただ修復しようとしただけではない。次に進むためには、修復しなければならなかったのである。

トークショーが終わってから、ひとりの女性が話しかけてきた。彼女はウイコンシン州マディソンの病院の看護師で、その病院では親に虐待されてきた成人を診ていた。「まるで、うちの患者さんたちのことを話しているみたいでした」と彼女は言った。「みんなそんな感じなのです」。彼女の患者は三〇代、四〇代、五〇代の大人なのに、いまだに両親に愛してもらいたいという子ども時代の欲求にとらわれたままなのだ。

彼女の顔に浮かんだ優しさと悲しみをいまだに忘れることができない。彼女は、「サルが教えてくれたことがあるとすれば、生き方を学ぶ前に愛し方を学ばなければならないということだ」というハーロウのメッセージを完全に理解していた。

サルを使った彼の研究には、動物実験の可否という倫理的問題がつきまとう。しかし、彼が愛と現実の人生の間に見出したつながりは、五〇年以上も前に彼が説明したときと同様、今でもとても強力だ。

ベーシックブックス社がこの本の新版を出版すると知って、私はとてもうれしく思った。二〇〇二年に初版を刊行した後、私は二冊の著書を出版したが、本書はいろいろな意味でもっとも気に入っている本のひとつである。

そう書くと、意外に思う読者もいるかもしれない。なにしろ初版の序文で、「最初に本書のアイデアを思いついたとき、すぐに却下しようとするのをかろうじて思いとどめた」と書いたのだから。私は霊長類研究の倫理問題を調査した前著『なぜサルを殺すのか』で、ハーロウのことを書いていた。おおむね批判的な見方をしたので、それに対して彼の昔の同僚や友人たちの多くが怒っていた。「ニューヨーク・タイムズ」紙が掲載した好意的な書評さえも憎い、と伝えるために電話をかけてきた人もいた。これ以上時間をかけて霊長類研究を調査する気にはなれなかったし、いずれにせよ、もう誰も私に話をしてくれないだろうと思っていた。それなのに、ハーロウのことがなぜか頭から離れなかった。数年後、「マザー・ジョーンズ」誌で育児放棄の破壊的な影響について連載を執筆していたとき、「でも結局のところ、これはハリー・ハーロウの業績だわ」と思い至った。そして、ハーロウの成し遂げたことを再び考えるようになった。彼のおこなった霊長類研究ではなく、彼の研究が持っていた力そのものについて、他者との結びつきが人生でどれほど重要かを思い知らせた彼のやり方について考えるようになったのである。

私は初版の序文にこう書いた。「それがこの本だ。ハリー・ハーロウの伝記でもあり、愛は重要であるという、意外なほど最近になってようやく科学が受け入れた考え方の記録でもある。一冊の本を読むのは、旅をするようなものだ。その旅の終わりに、私はハリー・ハーロウを好きになれただろうかと自問自答してみた。……簡単な質問だが、答えるのは簡単ではない。私は彼の話を聞くと、また聞きなのに笑ってしまう。彼のおかげで、以前には思ってもみなかった観点から、友情や親子関係やパートナー同士の関係を考えるようになった。今でもまだ、彼が短気で怒りっぽい友だちのような気がしている。完全にリアルな存在だと思えるのだ」

実際のところ、あまりにもリアルなので、私は彼と心の中で会話をしていた。私にとって彼はもはやウイコンシン大学のハーロウ教授ではなく、ただのハリーで、厄介な友だった。「どうしてそんなこ

とを言ったの、「ハリー？」と、とりわけ女性嫌悪の発言や、自分の研究をわざと挑発的に表現した文章を読んだ後には、すっかりお手上げになって尋ねたものだ。「どうしてそんなことをしたの？」と。私があまりにしょっちゅう彼に話しかけ、彼のことを話題にしたので、今では子どもたちはこの本のことを「ハリーの本」と呼んでいる。

しかし、コンピュータサイエンスの研究者に関する本を執筆中の友人と話したときのことを思い出すと楽しくなる。その本の主人公は、優秀であるばかりか善良でもあり、大きな可愛いクマさんみたいな研究者だった。友人は愚痴を言ったものだ。「みんな、彼のが好きなんだ。彼のことを面白く書くのは本当に至難の業だよ」

私は思わずにやりとした。「私には無縁の問題ね」

もちろん、問題は他にあった。私の前著に対してハリーの家族や友人が感じていた憤懣を、なんとかして打開しなければならなかったのだ。ある科学者は言った。「あなたの最初の本は大嫌いだし、あなたのことにも気に入らない。だけど、彼については教えてあげたい」。別の研究者——まさに私の母校であるウイスコンシン大学の研究者だった——は、友人に電話してまわって、私に何も話さないようにと釘を刺した。それでも、たいていの人は話してくれた。私の魅力と説得のなせる業わざだと言いたいところだが、ほとんどの場合、彼らは自分の人生や研究においてあまりに重要なその人物の物語について、何かしら言いたいことがあったのだと思う。

ハーロウの学生の多くは、独力で影響力のある霊長類学者になり、社会行動や人間関係に関する先駆的な研究をおこなっている。その中には、カリフォルニア大学デイヴィス校のウィリアム(ビル)・メイソン、マサチューセッツ大学アマーست校のメリンダ・ノヴァク、そしてもちろん、行動生物学の非常に複雑な問題を徹底的に研究しつづける国立小児保健・人間発達研究所のステイヴ・スオミもいる。

彼らのほとんどは、ハーロウと同様に、動物の権利運動団体——特に、これほど利口で、これほど感情的なつながりを持ち、これほど私たち人間と近い関係にある動物を断じて実験に使ってはならない主張する団体——から痛罵されてきた。その問題が、ハリーの研究の多くに暗い影を落としている。私は、彼の人生で起きたとおりに、本書でそれらを取り上げようと思う。研究仲間ですら、彼はいくつかの実験で越えてはならない倫理的な一線を越えてしまったと述べる。とりわけ、先ほど述べた親による拒絶実験や社会的隔離の実験をしたせいで、彼は動物の権利運動が目の敵にするシンボルになってしまった。ハーロウに対しても、彼の研究分野に対しても、こうした善悪に関わる暗い問題についても、正當に評価できていることを願いたい。だが、本書は包括的な伝記でもなければ、心理学の詳細な歴史を書いた本でも、倫理の本でもない。むしろ、サルサルの社会(ひいては人間の社会)における関係性の役割を理解しようとして人生のほとんどすべてを捧げた、ひとりの非常に複雑な科学者とともに歩む旅である。かつてハリーは、すべての人には「愛情の確固とした基盤が必要である」と言った。本書は何よりも、そうした感情の基盤まで掘り下げようとした彼の努力を記した本である。

最後に、私の故郷であるウイスコンシン州マデイソンのヴィラーズ動物園に行った日のことを書いておきたい。私はいつものようにサルや類人猿をほればれと眺めながら、ハリーと心の中で会話していた。彼はここで二匹の年老いたオランウータンを使って、初めて霊長類研究をおこなった。私は現在いるオランウータンの家族を見に行った。灰色をした石器時代風の顔や、銅色の毛に包まれた体をしたオランウータンを見るのが大好きなのだ。この日、ヴィラーズ動物園のオランウータンたちは、生まれたばかり

りの赤ちゃんと一緒に屋外に出ていた。赤ちゃんは、両親の巨体とは対照的に驚くほど小さかった。私は初版の序文にこう書いた。「ヴィラーズ動物園のオランウータンには、生まれたばかりの赤ちゃんがいる。母親は赤ちゃんをぎゅっと抱きしめている。胸と胸をぴったりくっつけて、離せば生命の自然法則に背くことになると言わんばかりに。もしかしたら、ハリーがよく言っていたように、科学はよく常識に追いつこうとしているのかもしれない。母と子は、二つの心臓がひとつになって鼓動しているのではないかと思えるほど、ぴったり密着している。もしかしたら、答えはこのガラス越しの風景と同じくらい単純なのかもしれない」

今回、この文章をひとことだつて書き換えようとは思わないが、この希望だけは付け足しておきたい。そうした原則を私たちが理解すること、ハリーやその同僚の業績を基にして研究をさらに進めることが、そのような瞬間を味わったことのない人々を救う手立てを見つける助けになるのだ。病院の看護師が語ったような人々、愛情の確固とした基盤をいまだに探し求めている人々を。ハリー・ハーロウ物語のエンディングとしてはそれが最高だろう。

はじめに——新版によせて

3

プロローグ 弧を描いて飛ぶ愛

13

1 ハリー・ハローウの誕生

19

2 人の手に触れてもらえない

51

3 アルファ雄

89

4 好奇心の箱

123

5 愛の本質

153

6 完璧な母

191

7 愛の連鎖

227

8 箱の中の赤ちゃん

273

9 冷たい心、温かい手

303

10 愛の教訓

339

エピローグ 行き過ぎの愛

381

謝辞

403

訳者あとがき

409

註

429

プロローグ 弧を描いて飛ぶ愛

白い部屋の中で、二人の男が愛について語り合っている。ひとりは洒落たスーツを着こんで、しゃきつと姿勢よく立っている。もうひとりの黒髪の男は、エレガントとは言いがたい。猫背で痩せており、だらりとした実験用白衣の中に縮こまっている。二人の声が薄暗い室内にうつろに響く。冷たく光っているような部屋だ。そばにあるカウンターは、氷のように無機質に磨き上げられている。金属製やガラス製の器材が蛍光灯に照らされ、青みを帯びてチカツと光る。こうした寒々とした雰囲気の研究室を背景に、男たちはずいぶん場違いな会話をしている。詩人やラブソング、星降る夜、白昼夢など、ひどく甘ったるい話題が続く。

いや、彼らは少しばかり時代に先んじているのだ。一九五〇年代末の当時、研究室でこのような言葉を使つて愛について論じる者などいない。人間行動の飽くなき研究の徒ともいふべき心理学者ですら、

表やグラフや測定器の世界に、心温まる愛を迎え入れようと訴えたりはしない。実験心理学者は、愛という概念をまともな研究対象として取り扱うことを長年拒みつづけていた。心理学の権威たちは、愛のような曖昧で感傷的な感情は物語の世界のものであり、研究論文で扱うものではないと明言していた。人間関係を研究する学者も、愛という言葉を使うのを避けている。スタンフォード大学のアーネスト・ヒルガードが執筆して高い評価を得た『アメリカ心理学』をひもとけば、「愛」という単語が事索引のどこにも載っていないことがわかるだろう。

要するに、その白衣を着た小男にとってみれば、このような会話をするだけで学者生命が危ぶまれるのである。彼は実験心理学者なのだ。むさくるしい頑固な中年の研究者で、名前はハリー・フレデリック・ハローウという。彼はあるときふと、自分の学んだ心理学は間違っていると考えるようになり、それからというもの、誰にはばかることなくそう公言していた。もちろん、問題があるのは彼自身の方だ、と幾度となく指摘されてきた。アイオワ州の貧しい家の生まれで、驚くほどズケズケとものを言う彼は、主流の心理学にケンカを売るクセがある。ハローウ教授は「言葉遣いを正すように」と何度も注意されてきた。「親しい関係」に言及する際には正しい用語を使用せよと指導されてきたのだ。彼はなぜ、他の人たちと同じように、それを「近接性」と言えないのか？ 親子、友人、パートナーについて語るとき、なぜかいつも「愛」という単語が彼の口から飛び出てくるのだ。その議論になると、彼がすぐにかつとなることは有名だった。マディソン郡のウイスコンシン大学にある彼の研究室を訪ねてきた客に対して、吐き捨てるようにこう言ったこともある。「君は近接性しか知らずに生きてきたんだ。ありがたいことに、私はそれ以上のことを知ってるんでね」

「ある人と人間関係を構築するには、どれくらい距離で立つ必要があるかね？ 三インチ？ 四イン

チ？ 六インチだったら構築できるかね？」。ハリーは、ゆっくりした嫌みたっぷりな口調で、よくこう質問した。同僚たちは、そんなにせせら笑う必要はないじゃないかと答えた。「近接性」という単語が嫌いななら、他の科学用語を使えばいい。「愛着」「条件反応」「一次的動因低減」「二次的動因低減」など、用語は他にも数多くある。フロイト派の用語を使いたいなら、「対象関係」と言えばいい。それなのに、なぜわざわざ「愛」という言葉を持ち込むのか？

さて今、ハリー・ハローウは、全米の津々浦々にまで放映される全国ネットのテレビ番組に出演し、彼のおなじみの用語を使って、感情的関係についての主張を披露している。あの研究室での会話は、「愛の測定」というタイトルでCBSテレビで放映されるのだ。一九五九年、日曜夕方の科学番組『コンクエスト』に出演したのである。三〇分の番組の中で、ハリーの口から「近接性」という単語が出ることは一度もなかった。

エレガントなスーツを着た男は、CBSの有名なジャーナリスト、チャールズ・コリングズウッドだ。堂々たる押し出しで、カメラに大きく映る。それに比べると、ハリー・ハローウは小さく、ありきたりの白衣の中に縮こまっているように見える。角張った顔、ほぼ一直線の眉毛に黒い目、短めの黒髪はきつちり後ろに撫でつけられている。声は少し高めで、コリングズウッドの低いガラガラ声よりも滑らかだ。

しかし、科学を語るその声は、意外にも説教壇の伝道師にぴったりで、独特の抑揚のある節まわして話をした。それまで「定義も測定もできない」と言われてきたものを、実際に定義し測定することは可能なのだ、と断言するハリーの口調には音楽のような響きがある。彼の話聞いてみると、愛には実体があり、試験管に注ぐことさえできると信じ込んでしまいたいそうさ。愛が話題にのぼると、コリングズウ

ッドは視聴者にこう話しかけた。「みなさんと同じように、私にもよくわかりません。しかし、当て推量というのは科学のやり方ではないのです」。彼のガラガラ声に力がこもる。「こ、こは、科学の研究室です」。番組の冒頭で、コリングズウッドは片手にサルを抱いて立っている。明るい色の目をした赤ちゃんザルで、頭の産毛は天然のモヒカン刈りだ。カップの中の卵のように、コリングズウッドの丸めた手の中で丸まり、手のひらの端に小さな指を巻きつけている。ハリー・ハーロウは霊長類の研究者であり、ヒトの行動を理解するためにサルの行動を理解しようとする、新たな科学の開拓者なのだ。コリングズウッドは、その点を少し強調するような身振りで、サルを乗せた手をさっと振る。「この研究室には、一二〇匹くらいのアカゲザルがいます。研究目的は、『母親に対する幼児の愛とは何か』という問いの答えを見つけることです」

番組の中では、「テレビカメラが回っていないときのハリー・ハーロウ」とも言うべき、例の不遜な態度は微塵もない。ある大学院生が黄金に輝く月を指差したとき、この男はこう言い放ったのだ。「ずっと長い間そこにあるね。前にも見たことがあるよ」。今は、イライラした辛辣な態度は影を潜めている。顔を輝かせて甘い声で話すこの科学の伝道師は、その話題の美しさに完全に心を奪われているようだ。研究室に住み込み、夜明けから夜ふけまでコーヒーとタバコとアルコールと妄執を注ぎ込む普段の姿は、テレビ画面からはうかがい知れない。そう、おそらく妄執が突き抜けてしまったのだろう。彼は議論に没頭し、世界を説得しようとしている。科学が注目しさえすれば、愛の測り方を知り、コリングズウッドが子ザルを抱いたように、私たちの手の中にすくいとることができるのだ、と。

「さて、コリングズウッドさん、あなたがその赤ちゃんザルを怖がらせたとしましょう。赤ちゃんは母親のところへ走って行って、なだめてもらう。すると恐怖は消えてしまっって、完全な安心感に変わる。

それは、赤ちゃんが母親を愛しているということだとは思いませんか？」とハリーが甘ったるい声で尋ねる。

「もちろんそうでしょう」とコリングズウッドは軽く答える。そう、もちろん当たり前のことだ。愛とはとりわけ安全な避難所——怖がる子どもを抱き上げて、ぎゅっと抱きしめる親の腕——であると思わない者がいるだろうか？ しかし振り返ってみれば、信じられないことに、これまで数多くの権威ある科学者たちがこの考えに反対してきたのである。「心理学では、愛とは煙や鏡像のような実体のないもので、戯言だった。誰も彼もがハリーにそう言っていたんだ」と、ハリーの教えを受けた大学院生のひとりが語っている。カメラを直視して当時の心理学の常識を否定することは、CBSテレビの誰もが考えるよりずっと勇氣のいることだったに違いない。

番組では少しの間、研究室での実験の様子が映し出される。そこでは、ハリーが説明したとおりのことが起こる。科学者が機械仕掛けの怪獣を送り込む。背丈は二〇センチくらい、光る目と黒いコウモリのような羽のある、宇宙人とドラゴンの中間みたいな怪獣だ。「悪魔みたいだ」とコリングズウッドが言う。「確かに赤ちゃんザルにはそう見えるだろうね」とハリーが答えるのとほぼ同時に、赤ちゃんザルたちはこの恐ろしい物体を一目見て、飛び上がった。

まるで誘導ミサイルみたいだった——赤ちゃんたちは母親へ向かって、完璧な弧を描いて飛んだ。見てごらんさい、とハリーが口元を歪めて言う。一匹の赤ちゃんザルは母親にしっかりとしがみつつき、怪獣に向かってキーキーと怒号をあげ、威嚇している。あっちに行け！ 僕はお母さんと一緒にいるんだ！ 互いを護る方法で愛が測れるのだとしたら、それは親元に至る優美な飛行ラインにはつきりと表れていた。

二人の男は、静かにそれを見ている。付け加えて何かを言う必要はない。ハリーにもそのことがわかつている。一歩下がって見ていけば、その関係性はひとりりで明らかになる。赤ちゃんから母親へ、ハートに突き刺さる矢。とはいえ、彼には皆に伝えたい重要なメッセージがある。そのために、ぶかぶかの白衣を着てここに立ち、単純な愛情がいかに大切かを説いているのだ。五〇年以上にわたって信奉されてきた科学の定説をなぜ否定すべきなのか、それが納得できるほど強いメッセージだ。

愛について話している二人の男には、それぞれ違う目的がある。チャールズ・コリングズウッドがウイスコンシン州マディソンにやってきたのは、前代未聞の実験に光を当てて、見どころのある番組を制作するためだ。ハリー・ハーロウはそれに手を貸している。しかし、小さな革命を起こそうともしている。危険を承知で、チカチカ光る日曜日の白黒テレビの画面に登場して、議論を巻き起こそうとしているのだ。

私たちの人生は愛とともに始まる、とカメラをまっすぐに見てハリーは言う。私たちは人とのつながりを家庭で学ぶ。それは人生を築き上げていくための土台であるし、そうあるべきなのだ。サルであるうが人間であろうが、もし幼少期に愛を学ばなければ、「おそらく、一生愛を学ぶことはない」。彼は自分の言っていることに絶対的な自信を持っているかのように見える。目下継続中の激烈な議論などまったく存在せず、心理学界を代表して演説しているかのように見える。自分の意見を第三者のように語る術は、ハリー・フレデリック・ハーロウが子どものころから磨いてきたスキルである。曖昧で、信頼性に欠け、捉えどころのない「愛」と呼ばれる感情のために、彼はためらうことなく立ち上がり、カメラのレンズを見つめてこう語る——私の話に耳を傾けなさい。大切なことを話しているのだから。

1 ハリー・ハーロウの誕生

あの感動を禁じえない、だが実のところ非常に子供じみた親の愛情というものは、彼らのナルシズムが生まれ変わったものにはかならず、対象愛へ姿を変えながらも、かつての本質をまっことなくあらわにするのである。

ジークムント・フロイト（一九一四年）

彼は生まれる場所を間違えた夢想家であり、詩人だった。無味乾燥なアイオワの土に育ち、トウモロコシ畑に咲くバラの花ほどに場違いだった。ハリー・フレデリック・イスラエル（後にハリー・ハーロウとなるのだが、それはもう少し先の話である）の幼少期を思い出すたびに、彼はいつも笑い出してしまふ。おかしな小さなはみだし者だった彼は、整然とした畑に閉じ込められ、その緑と黄金の列が空の縁と出会うところを夢想してばかりいた。

なにしろ、アイオワ州東南部である。誰も彼もトウモロコシ畑に囲まれて育った。二〇世紀初頭のその眺めは、まさに典型的な開拓地だ。しかし矛盾するようだが、その整然とした風景こそが、革新的な国の姿だったのである。ほんの一〇〇年足らず前には、この土地はオオヤマネコやオオカミ、シカ、バツファロー、油断大敵のピューマ、明るい銅色のキツネのものだった。背の高い草が広がる草原、木々

に覆われた丘、土手ひとつない自然のままの川、カエデやカバノキなどなじみのある木々と、シナノキやアサダといった、もはや忘れ去られた木々が生い茂る森。インディアンのフォックス族とソーク族はかつてここで狩りをし、植物を集め、なわばり争いをし、この土地を故郷と呼んでいた。

古参の入植者たち（アイオワ人にとって、「開拓者」^{パイオネア}）という言葉は、定住しない流れ者というふうに聞こえるのだ）は、一九世紀の初頭にこの土地を開拓しはじめた。ずっと後にハリーが生まれることになるフェアフィールドという小さな町ができたのは一八三六年のことで、昔ながらの広場を中心にした街区が整然と広がっていた。それから数十年の間、フェアフィールドは辺境^{フロンティア}のまま、一八七〇年代になるまで町をブタが走りまわっている有様だった。市長がとうとう、家畜は閉じ込めておくべきだと主張すると、ブタの飼主たちは、それは自由を冒瀆することだと怒って抗議した。住人たちは自分の育てた作物で支払いをし、町医者は鶏からトマトまで何でも受け取った。街角の薬屋はインディアンの薬草を客に売っていた。はしかにはカモミールの花、肺炎にはつるつるしたニレの樹皮で、それぞれ布袋にきっちり詰めてあった。

ここでは科学は何か遠い存在で、まったく非現実的で、たいして重要ではないものだった。「世界が無数の魅力的な生物であふれているとか、足元の岩に地球の歴史が刻まれているなんて、ほとんどの人は知らなかったし、関心もなかった」と、フェアフィールド史を研究しているスーザン・フルトン・ウエルティは、愛情に満ちた郷土史の中で書き記している。一九世紀の終わりに、数名のフェアフィールド高校の生徒が「科学部」を結成した。熱心ではあったものの、観察対象が謎に満ちていることを発見するのが関の山だった。最初のころのミーティングで問題になったのは、「コウモリは鳥なのか？」である。メンバーの大半は自然収集家で、ピンで留めた昆虫やドライフラワー、シダやコケなどの脆い化

石、分類したさまざまな骨で部室をいっぱいにした。あるときなど、近くの空き地に転がっていた白骨から、まるまる一頭の馬の骨格標本を組み立てたこともある。

ハリー・イスラエルが生まれたころには、フロンティアはすっかり整備されていた。町の通りはきれいに舗装された。ソーク族やフォックス族は西へと追いやられ、ほとんど姿を消していた。薬草は赤レンガの病院や西洋の薬に取って代わられた。森林や草原は開墾されて作付けされ、自然のままの姿を失った。熱心な科学愛好者でさえ、もう骨集めなどやらない。町の高校では、「もつとも高等な脊椎動物である人間に特別な注意を払って」自然研究を教えていた。ハリーには、なんと言おうか、もう少し予測不能な方が性に合っていたことだろう。後になってから、完全に秩序立てられた科学にはうんざりしたと告白している。規則を絶対的なものとして受け入れることなど、彼には到底できなかった。「われら人間」が進化の極致だなんて、断じて納得できない。なぜなら進化はおそらく今も進行中なのだから。彼はこの問題について嬉々として議論したことだろう——フェアフィールドが議論を歓迎する土地柄だったならば。ハリーは議論するために生まれてきたのだ、と家族はよく言ったものだ。友人も同感だった。高校の卒業アルバム^{アルバム}の彼の写真の下には、こんな言葉が書かれている。「少々小柄だが、皆さんよくご存じのとおり、議論にすばらしく長けている」

一九〇五年一〇月三十一日のハロウインの夕方、フェアフィールドの自宅で彼は生まれた。「誕生して三〇分で、私は家族に激烈なもめごとを引き起こした」とハリーは記している。オレゴン州ポートランドから遠路はるばるやってきたネル叔母さんは、いちばんに赤ちゃんを抱きたがった。だが、ハリーの二人の兄が、ハロウインの家めぐりに連れていってとネル叔母さんにせがんだ。そして、三人が家に戻ってきたとき、赤ん坊のハリーはハリエット叔母さんの腕の中に居心地良く抱かれていたのだった。

ハリーは後々、「これぞまさしく、『遅くても、来ないよりはマシ』に当てはまらない状況さ」とジョークにした。ハリエット叔母さんはフェアフィールドのすぐ近くに住んでいたが、ネル叔母さんは何百キロも遠くからやってきたのにこの扱いだ。そのうえ、恩知らずな両親は、赤ん坊に「ハリー」という名前をつけた。そのため、家族の昔話でハリーが生まれたときが話題にのぼると、いつでも一荒れしそうな不穏な空気が流れるようになった。

「私は覚えていないのだが、三歳のとき、事件がもうひとつ起きた」とハリーは未発表の自叙伝に書いている。子ども時代の話をするとき、彼はいつもこうした話し方をした。アイオワでの幼少期について、いつでも冗談めかして話すのである。彼によると、ハリー坊やが陶器でできた子ども用のおまるを持っていて、とても気に入っていたそうだ。家の中ではいつも持ち歩いてきた。母親の話によれば、ある日のこと、「私はやむにやまれぬ科学的好奇心に駆られ、どうなるのかを見たいあまりに、おまるの底に大きな石を投げ落とした」。それから何日も、彼は破片を見ては泣きじゃくった。一生を通じて救いたい駄洒落好きだったハリーは、「岩^{ロック}が底^{ボトム}に当たったせいで、悲^{ロック}しみの^{ボトム}どん底に突き落とされたのだから」と書いている。

彼の両親の名前は、アロンゾ・ハーロウ・イスラエルとメイベル・ロック・イスラエルという。ハリーがどこかのみだし者だったのは、おそらく大部分、父親から引き継いだのだろう。ロン・ハーロウは「アロンゾ」という名前を忌み嫌っていたので、成人してからは、誰であろうとその名前で呼ぶ者には返事しなかった)、かつて医者を目指していたが、メイベル・ロックと結婚するために三年生で医大を中退し、その夢をあきらめた。しかし、医学の勉強以上に好きなものを見つけたことができなかった。嫌々ながら農業に手を出したものの、喜んで投げ出し、ハリーの言うところの「ときどきやってみる、

ぱっとしない発明」をいじくりまわしていた。家庭用の器具の実験をおこない、一度などは小さな洗濯機を開発したこともある。自動車修理と電池関係の事業に首を突っこみ、週末には熱心にマニュアルや本を読み、独学で機械について学んだりもした。父親とともに小さな不動産屋を始めたこともある。やがて、ロンとメイベルはフェアフィールドの近くの小さな町にある雑貨屋を買って、そこに落ち着いた。ハリーが生まれたのは、両親が三〇代半ばとなり、結婚して一〇年が経ったときのことだった。現在、フェアフィールド公立図書館には、結婚式の日のロンの写真が保管されている。痩せていて、とがったあご、濃い眉毛に焦茶色の目、薄い唇の端に微笑を浮かべている。裾がふわっと浮かんでいるような白いレースのドレスを着たメイベルの写真もある。メイベルは身長が一五〇センチほどしかなかった。写真の中の彼女は妖精みたいに繊細で、その姿は優雅で華奢、かなり美しい小さな顔から、つやつやとした黒髪を滑らかに後ろへと撫でつけている。イスラエル一家には四人の息子がおり、上から順に、ロバート、デルマー、ハリー、ヒューといった。息子たちは全員、母親の華奢な体型と父親の焦茶色の目と濃い睫毛を受け継いでいた。ハリーの顔には、メイベルの整った顔立ちと少し角張った頑固な印象のあごも見てとれる。

ハリーの記憶によれば、両親は子どもたちが自分たちより立派に成長するはずだと固く信じていた。だが、そのためには並々ならぬ努力が必要だった——その教訓は、早くから学ぶことになる。ハリーが三歳のとき、兄のデルマーが、脊椎の結核とも呼ばれる脊椎カリエスだと診断されたのだ。ロン・ハーロウは、その病気については町の医者よりも先見の明があった。次第に曲がっていく息子の背中を心配したロンは、細い鉄棒をその奇妙なカーブと同じ形に折り曲げ、シカゴの研究病院へと送ったのである。病院の医者は、その特徴的な曲がり方から脊椎カリエスの診断を下し、もっと温暖で乾燥した気候のと

ころに患者を移すようにとアドバイスをした。当時、それが脊椎カリエスの一般的な治療法だったのだ。息子のことが心配でたまらなくなったイスラエル一家は、家売ってニューメキシコへ引越した。金がなかったため、ラス・クルーセス郊外の小さな渓谷でキャンプを張った。日光がさんさんと降り注ぐニューメキシコの空気のおかげでデルマーの健康は改善したが、もともと貧しかった一家は、さらに貧しくなった。そのうえ、春になると発生する洪水によって、残っていた持ちものもすべて失ってしまった。一時はテントの中まで水浸しになり、ロンは増水する川から子どもたちを抱えて避難しなければならなかった。一年余りで一家はほとんど文無し状態となり、フェアフィールドに戻ってやり直すこととなった。

ハリーによると、彼の両親は「文字どおり、子どもたちのために生きていた。幸いにも金がなかったので、本当に甘やかすことはできなかったがね」。けれども、もう少し甘やかしてくれたら（言い換えれば、もう少し愛情を注いでくれたら）、ハリーはうれしかったに違いない。何年も後になってから、彼は自らの研究によって、当時の自分がどれほど後まわしにされているように感じ、それを嫌だと思っていたのにか気づくことになった。「母は小柄で美しく、働き者で、器用な女性だった。四人の息子を、そしておそらくは夫のことも、かいがいしく、愛情をこめて、つつましく育てあげた。私は、母が心から愛してくれているといつも思っていたし、本当にそうだったと思う」。しかし、デルマーの病気のせいで、「母はたぶん、他の子どもにも惜しみなく愛情を注ぐことができないくらいに追い詰められていたのだろう」。兄が病気がかかったとき、ハリーはまだ幼児だった。母親は物理的にはすぐそば、つまり家の周囲にいた。だが感情的には、小さな恥ずかしがり屋の弟にとって、それで十分とは言えなかった。「母親と一時的に離れていたという記憶はないが、たぶん母親の愛情を受ける時間の何割かは奪われて

いたのだと思う。その喪失のせいで私の思春期は失われ、孤独な大人となってしまったのだろう」

フェアフィールドには、当時五〇〇〇人ほどの入植者がいた。塔や胸壁で屋上を飾りたてた建物が建ち並び、靴屋、食料品店、製樽所、仕立屋、薬屋、服屋、家具屋などが入っていた。広場は、郊外で耕作する農民たちの集会所になっていた。畑が凍りつき、フェアフィールドへの道が深い雪に覆われる冬でも、農民たちは町にやってきた。荷馬車の車輪を外して、重たい鉄の滑走板につけ替えればいいのである。フェアフィールドの子どもたちは町の通りで、農夫の櫛くしから櫛へと飛び移って遊んでいた。その遊びは「ホッピング・ポブ」と呼ばれており、農夫たちはびよんびよん跳ねまわる子どもたちを見ても、機嫌よく鷹揚に構えていたという。

フェアフィールドは農業の町だった。ハリーの父は不動産屋をやっている間も、自分を農地の所有者として登録していた。地元の高校では、一般的な文科と農業教育の両方が教えられていた。女子は「男性が喜ぶ料理法」といった家政学の授業を履修しなければならなかったし、男子は輪作から害虫駆除まで農業経営を学んだ。町の木造の家やレンガ造りの店舗や整然とした街路は、町の外に広がる農場や整然とした畑へと、ほとんど境目なく変わっていく。そんな場所に、この物静かで夢見がちな少年はいった庭の世話でさえ、これっぽっちの関心もなければ、うまくやることもできなかった。後年、ハリーの長男であるロバートはこう述懐している。「父が庭仕事をやってみようとしたことが何度かある。しかし、そのたびに貴重な花壇の植物を引っっこ抜いてしまうので、結局、わが家ではいつも『庭師を呼べ！』ということになるんだ」。大人になっても、ハリーはゼラニウムにもキンセンカにも興味を持たなかったし、ましてや子どものころには、畑になどいっさい興味がなかった。彼は詩を書き、絵を描くのが好きだった。あるときなど、作文の宿題を終えたのに、「どうもおかしかったから」という理由で提出しな